

# 姥捨て

△6▽

奥野忠昭

ぼくは二階へ行つた。涼子はベッドの上にあぐらをかいて、横のテーブルにビール瓶をたて、大きなジョッキにビールをみなみみとついで飲んでいた。泡を口いっぱいにつけ、眼の縁を赤らめて飲んでいた。すでに軋かん軋の臭いが出ていた。

「やつてるじゃない」

「そうよ、やつてるの」

涼子はひといきに半分以上飲んだ。大きな嘆息をついた。東陽が窓からガラスを刺した。

「おばあちゃんが、こんばん寝においでつて言つたんだつて」

「孝がそう言つてゐるのか。困つたことだ」

ぼくは窓から顔を出して、今、男を追つかけて行った道を眺めた。あの男、歩みながらよろけていた。それでスピードは変えなかつた。よほど疲れたふうだつた。

あの男の顔を見たかつた。  
「わたしになつかせるよう努力しますなんてかっこいいこと言つて」

「母も淋しかつたんだよ、きっと。」

「あなた、ちゃんとしなきや、わたしだつて出でていま

すよ。洋子さんのようにおとなしくないからね。慰謝料なんかがつぱりもらつてさ」「ぼくは空になつたジョッキーにビールをいつぱいついだ。

「まあ、酒でも飲んで氣でも晴らしてくれ」

子どもが上がつてきた。やややや、と腕を伸ばし、涼子の顔を指さした。

「おばあちゃん、顔がまっかやで」

不思議な動物でも見るよう顎からゆつくり見ていつた。

「おばあちゃん、おもしろい顔してんな」

「おい、ぼうず、仲よくやろな」

涼子が言つた。

「おい、おばあちゃん、仲よくやろな」

涼子が言つた。

「おばあちゃん、お酒好き」

「お好きじゃないわ」

「でも飲んでるやん」

「好きでなくとも飲みたいときがあるの」

彼はまったくわからないというふうに首をひねつた。だがそれ以上追求するつもりがないらしい。すぐに窓のところへ走つていつて外を眺めた。

「わあ、きれいに道が見えるわ」

顔や肩は朝日で真白だ。シャワーの水ほどはねている。でも、背中は影になつてゐる。荷物を背負つてゐるよう見える。黒色の平たい荷物だ。やつも今だけだろう。そのうち影は腹の中を滲みとおつて、むこう側まで

とどくだらう。

「夕べ、おばあちゃんが寝においでつて言つたのかい」「ね、どうしておばあちゃんと寝たらいけないの」

「もう四年生だろう。ひとりで寝なきや」

「あっ、公園で野球している」

「今夜からひとりだぞ」

「わかってる。おばあちゃん、かわいそうやつたから」  
息子はそのことにはまったく関心がなかつた。公園でのボールの移動に従い、眼が左右に動いた。

「ひとりでも淋しいなんて言つたらダメだぞ」

「おばあちゃん、きょうからいないのか」

「誰が言つたの」

涼子が尋ねた。

「おばあちゃんさ」

「へえ、覚悟しあはつたんやろか」

「ね、なんで別々に住むの」

「おばあちゃん、ひとりで住みたいんだってさ」

「おばあちゃんとけんかするからやろ」

ぼくたちは顔を見合させて笑つた。ぼくの心臓は興奮した。笑つてごまかしているがまつとうに答えると言わればどう答えていいかわからない。

「おかあさんとおばあちゃん、仲良かつたの」

涼子が尋ねた。息子は答えなかつた。彼なりに氣を使つたのかもしれない。

「おばあちゃん、そうおつしやつてしましましたよ。とても仲が良かつたんだつて。そりや、最初は気も使いあつたけど、最近じや、おかあさん、おかあさんつて大事してくれたんだつて」

「ねえ、公園へ行つてきていい」

息子が言つた。

「どうだい、この家氣に入つたかい」

ぼくが言つた。

「行つてきていいわよ」

涼子が言つた。

子どもはすぐ走り下りた。母と何か話し合つてゐるふうだった。すぐ扉の開く音と軽快な足音が聞こえた。

「ほんとうかい」





ぼくが言つた。

「おまえ、かわいそうやないのか、あんなの聞いて」

「ああ、おもしろかつたよ」

母は一瞬、口をあけて放心した。

「気持ち、考えたつしたことあるのか」

「あんまり気にしてないみたいだよ」

「ばか。なに言つてる。どんなに傷ついてるか、おまえ

にはわからんのや」

「かわいそうや、かわいそうや思つたら、あいつがかわ

いそぎになる。子どもはもっと強いものです。大人より

もっと強いのです」

「おまえ親か、あの子の父親か」

「そうですよ。父親です。父親としてちゃんとやつてるつもりです」

ほんとうかという声がした。父親とは何だ。父とは何かわかっているのかという声もした。

「あの子、タベ、もうおかさん絶対帰つてけえへんなつてわたしに言つてたんや。泣きそうな顔して」

「おかあさんが泣かしたんだろう」

「生きていたらないといかん。あの子が大きくなるまで生きていられないと、死なれん、絶対死なれん」

母はまた父の写真に両手をあわせ、守つてやってください、守つてやってくださいと言つて狂つた。

「いまはあいつがいないからいいけど、帰つてきたらや



「めでほしいな」

「自分の孫のこと心配するのなぜ悪い。わたしが心配してやらないと、おまえにはまかしとけん」

「孝のことはぼくがちゃんとする」

「父親だったら、女つくつて、ほつき歩いたりするものか」

なんとでも言えまい。ぼくはもう母を見ない。部屋の壁を見わたす。木板の上に布を貼った壁、布には線状の模様が縦横に走っている。まだ新しいのに古びた灰色に見えている。

涼子が置いたのか、薬瓶の中に薔薇のドライフラワーが土色の花びらをすぼめている。天井からも幾本かぶらさがっている。ぼくたちが昨日ここに引っ越してくるまでにすでに涼子が先に住んでいて、暇々に造ったのだろう。丸いっぽみはあるで人の頭だ。逆さづりされた人の束がぶらさがっている。

心配なんかしくともいいと自分に言いきかせる。

「ちょっと見でみ」

母は新聞を持ってぼくのそばへやってくる。枯枝のような腕をさし出す。ぼくはインクの臭いのする新聞を取つた。

「そこのところ」

指で押える。中学生、父を刺殺、文字が眼に入る。

「その父親、子どものことほっといて、つりやヨットばかり行つてたそうや。殺したろうとずっと前から思つてたんだから」

母はお前ももう少したつたら殺されると言わんばかりだった。ぼくは読まない。大きく開けてスポーツの記録

に目を這わす。だが、何の興味もわからない。どこが勝つても負けても何のつながりもない。少年のころファンだったプロチームが負けているところの点数だけをちらつと見る。大差の負けだ。きっと選手たちは何らかの感情を抱いただろう。それはぼくにはわからない。当事者にはやりきれない感情だとしてもぼくたちは冷やかに見る。

他人とはみんなそんなものだ。自分が必死で考えたとし

ても、他からは陳腐な出来事としか映らない。

「心臓をひと突きだって」

母が言った。

「離婚してたのかい」

ぼくが聞く。

母は頷く。

「父親が悪いんだよ、ほんとに」

「悪いのは子どもさ」

ぼくが言う。

「世話をした父親を殺すなんて、母親を殺せばいいのに」

「勝手なんだよ、その男」

「子どもが勝手さ」

「おまえも、よう世話してやらんと……」

ぼくの心はめいる。たつたこれだけのことでぼくの心は滑り落ちる。

これも母の呪だつた。母のそばにいるかぎり呪はいたるところにはりめぐらされている。でも、もう少しのしんぼうだ。母を捨てる手はずがととのついている。

ぼくは外に出た。アスファルトの道はまだその原料の香りを残している。ところどころ丸く残されたアスファルトの穴から、赤土が覗き、そこに枯れかけの小さな木が葉のないまま陽を受け、細い影をくつきり、地面に這わしている。ぼくはかなり長く、じっと佇んでいる。黄色の光が背に降りそそぐ。明るさだけが無尽蔵にあたりにこぼれる。烟の草が燃えそうな息を吐く。緑色の気流があたりへ流れてくる。

ぼくは影をさがす。だが、その瘦せこけた木の影以外どこにもない。あんなに涼子のアパートは影で被われていたのに、どこからも陽があたらず、白く乾いていた部屋を思い出す。いつから部屋がこんなに明るくなつたのか。ぼくは明るさの中でとまどつてゐる。

# 神戸文学賞作品募集

小社は昭和五十一年創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動のいつそうの発展のために微力を尽したいと願っております。第一回神戸文学賞は田靡新「島之内ブルース」、同女流文学賞は小倉弘子「ペツトの背景」に、また、第二回神戸文学賞は奥野忠昭「姥捨て」、吉峰正人「生活」の二作品（同女流文学賞は該当作なし）と決まりました。ここに第三回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第であります。

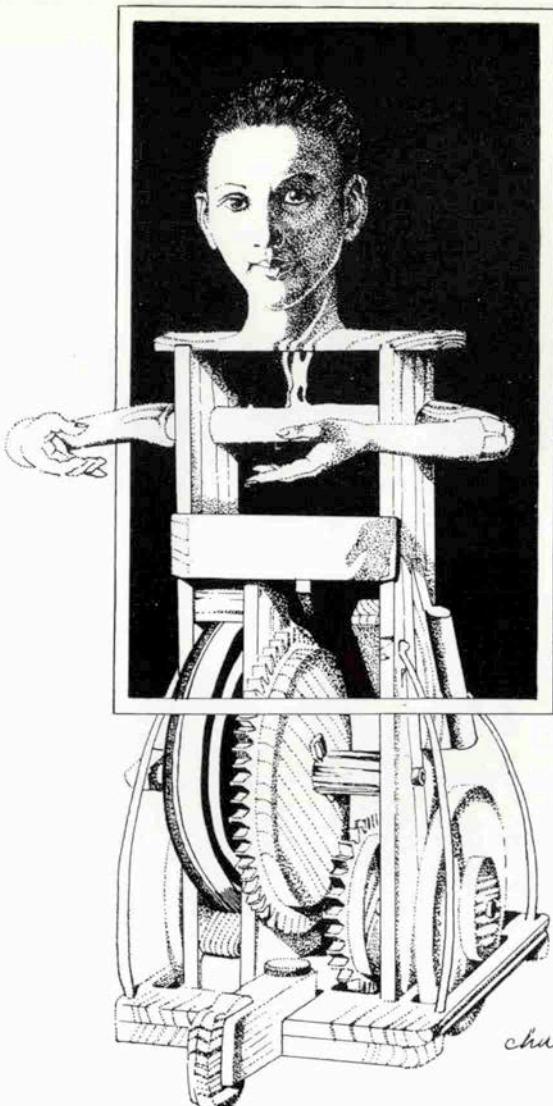
## △募集要項▽

- 一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者に限ります。
- 一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したるものに限ります。
- 一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。
- 一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題（創作主旨）をつけて下さい。
- 一、締切りは九月一日（当日消印有効）
- ☆なお、選考は本誌が依嘱した選考委員によつて行います。
- 一、入選発表は本誌昭和五十四年新年号誌上。同号より作品を掲載します。
- 一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。
- 一、入選作品の著作権は本誌に属します。
- 一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。
- 一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一一三の一 大神ビル七階 月刊神戸つ子「神戸文学賞係」まで。
- 電話〇七八一三三一一二二四六

# 生 活

吉峰 正人  
絵・榎忠

△第六回▽



それどころか、自分の子供の輝きを恐れているような怯えのようなものが感じられる。それにしても、この母親は自分の血や肉をどれほど子供に分けあたえたのか。それでも彼女たちは親子であることを少しも疑っていない。こうして一緒にいることに恐怖も戸惑いも感じていない。

子供を寝かしつけた女は立ちあがり、ぼくに近づく。

両手に真新しい掛布団をかかえている。それを坐つているぼくの肩口にかけながら、

「疲れたでしよう。休んでください」と抑揚のない口調で言う。言葉に感情がない。そのことがかえってぼくを怯えさせる。犬や猫に喋る時だってもう少し気持ちが入っているものである。ぼくはその辺の置き物くらいしかないのでかもしれない。

「もういい加減にしようよ。こんなことがいつまでも続くなはない」眠るどころではない。減入つていく気分を励ましながら喋る。

「明日にしましょう。もう遅いですから。これからはい

くらでも時間がありますのよ」言いながら女はスカートの前ポケットから腰紐のようなものを取り出す。そして、布団とぼくと柱と一緒に縛りはじめた。いや、ぼくはすでに柱にくくりつけられているので布団だけをとりつければいいのだ。

「やめろ！こんなことをしたって君は決してしあわせにはなれないぞ。満足は得られないぞ。こんなものは生活じゃない」大声で叫びながら体を揺すって拒む。このまま布団にくるまつて眠ることは、女の行為やこの状態を許容することになる。ぼくはそのつもりでなくとも女はそう思うだろう。しかし、柱が動かない限り、ぼくはどうすることもできない。それはぼくの存在をかたくなに主張しつづけてやめない。女は細い眼の先でぼくを見ながら、

「これはりっぱな生活ですわ。私にとつてはこれまでになく生きがいのある毎日になるでしょう。これから的一日一日が闘いの『生活』そのものです。あなたもこの暮らしに早く馴れていただきます。いえ、きっと気に入りますわ」ダイグイと体を締めつける。

こうして三日もいれば、ぼくは女の顔をすっかり覚えてしまい、彼女を妻だと思い込んでしまうのか。子供の仕ぐさを可愛いと感じ、眼を細めて見ながら一緒に小鼻をぶくぶくとふくらませるのか。この部屋を気に入り、一つ一つ飾り物を増やしていく楽しみを味わうのか。たえずまつわりついてくる湿気や空気の重さの中に、これまでになく明確に自分を発見するのか。ばかな！そんなことがあつてたまるものか。

布団のぬくもりがぼくを包みはじめている。女はぼくから離れ、フッと溜息のようなものを背中で吐く。その後ろ姿に向かって、

「どうすればわかつてもらえるのかね？」ほんとうに尋ねたかった。わかつてもらえるならどんなことをしてもいいと思つた。他の男を連れてくることで納得してもらえるなら、どんな危険を冒してもぼくはそうするだろ

う。しかし、女は答えず、電気のスイッチを切る。

なんと暗闇が似合う部屋なのか。全てのものが一瞬にしてその中に没し、そうすることによってより深い安堵を覚えているようである。子供の寝息はやすらかさを増し、秒針はより正確に強く動く。女は深い吐息の中にいる満足感のようなものを添えて吐き出し、暗がりの奥で寝間着に着替えている。タンスも机も鏡台も全てがその中にしつくりと溶け込んでしまった。このまま永久に、光はこの部屋に戻つてこないような気がする。

「頼む！」話しを聞いてくれ。ロープを解いてくれ。バカラロウ！冗談もほどほどにしろ……。ぼくの声はほんとうに相手まで届いているのだろうか。それっきり女は喋らない。だからといって、こちらまで黙つてしまふわけにはいかない。渴きを訴えている喉とケンカしながら、

「おい！電気をつける。まだ話は終っていないぞ。とにかくロープをほどけ。おい！こら！おいつたら！……」喋つても答えるものがない恐さ。しかし、黙つていることはもつと恐ろしい。

「おい！こら！ちくしょう」声を出しつづける。が、どんなに大声をあげても、眠つていてる子供を起こすこともできない。おいおいがやがてオート吠えるような唸りになる。

女は布団にすべり込む。横になつた女の腰あたりに、投げだしたぼくの脚の先がある。体に結びつけられていく布団はその先まで包むことができない。女は自分の掛布団をずらせてぼくの脚を隠す。生温かいぬくもりが指の間から這いつがつてくる。

「おやすみなさい」ぼくの膝のあたりに軽く指をあてがい女は言う。冷えた指先がふくらはぎを撫でている。女の感触が確実にぼくを冒しはじめている。

一匹の黒い小さな虫。体の割に羽根が大きく、方向や角度や速度はどうあれ、それを動かしている限りどこへ

でも飛んで行くことができる。羽根を自慢に、武器に、やたら動かしては飛びづけている。しかし、どうしたことか、羽根はどんどん大きくなり、勇ましくはばたくどころか、その広さと重みで動くことさえ困難になってきた。虫にとって飛べないということは屈辱である。そりそりと這つていたのでは生きていることにならないと焦躁する。まだまだ大きくなっていくそれを振り、こすり叩き、飛ぶ。少しはあがつたようだが見事に落下。また飛びあがり、すぐ落ちる。

あのぼつと明るいところが出口のようである。外に出てしまえばなんとかなりそうだ。羽根を広げ、こすりあわせる。広げるとそれはその部屋いっぱいになり、出口さえ見えなくなる。飛びあがり、落ちる。

頭を後ろからハンマーのようなもので殴られた衝撃。唾が右ころのようになつて喉に落ちてくる。胃がひくつきながらそれを押し戻そうとする。戻しきれず、のみ込む。ぼくは眼ざめる。はて？夜光液が塗られた時計の文字盤が見える。暗がりの中でそれは緑色に光っている。

十二時のところで重なった針が、ぼくにある状態をさつさと教える。

いつの間に眠つてしまつたのか。こんなはずではなかつた。眠つてなんかいられない。オーオーと何故いつまでも吠えつづけていなかつたのか。まさかここを氣に入つたわけではあるまい。こんなことをしていたのでは女を図にのせるだけだ。

ふと、女の手がぼくの足のくるぶしあたりに重なつていることに気づく。ほら見る、このなれなれしさを、おまえが甘いからだ……そんなことを言つたって、どうしようもないじやないか……その気になれば女の一人くらいいどうにでもなるさ……それがなかなか、この女、てごわいのだ……ほざくな、ははん、おまえ惚れたな……冗談じやない、こんなことをされて、そんな気になれるものか……いや、そつとは限らない、まるつきり自分の意志が役立たないと逆にいい感じになるものだよ……

「ぼくには妻もいるのだ……妻だって？ そんなもの、

三日も離れて暮らせば近づくことさえ恐くなるよ、一緒にいてこそなんとかやつていけるんだ……ウロウロしていれば妻が見つけてくれるよ、あいつはぼくといふことを少しも不思議がつていないから、いつでも平気でぼくに抱かれるのだから……彼女はそんなにはつきりしたことがわかっているのかね、人間なんて同じようなものを、抱かれるのは恐くないからではない、そうすることによってそれから逃れようとしているのだ……少なくとも、この女は妻ではない……妻であつてもおかしくない、それなりに暮らしていけるもんだよ……

縛られていても足や手の指は動く。脚だつて二本一緒にであれば少しくらいなら持ちあげができる。腹筋はそんなに弱くない。わずかでも女を意識していることは苛立つ。言いなりになつてていることは腹立つ。足の指をめつたやたら人形劇の指先のように動かし、くついた二本の脚をできる限り移動させる。

「どうかしましたの？」女が半身を起こして言う。しめたとぼくは思い、

「どうもこうも、こんな格好じや眠れない」同じことを何度もくり返してもいい、話しを最初に戻すことだ。そこからはじめなくてはやこしくてならない。

「あら、よくおやすみになつていましたよ」言いながら女はまた膝のあたりを撫ではじめる。眠らず見張つていたというのか。

「やめてもらえないか、そんなこと」

「私の気持ちもわかつてください。眠るのだつておしいくらいいなんです。あなたを感じていていいのです」女の手は膝を上に這う。指を屈伸させ、脚をばたつかせ、ぼくは逃げる。が、離れない。腰をひねり、腹の肉を硬直させ……その時、ふと、尿意を感じる。

尿意……この女はどうするつもりでいるのか。生理現象という生まじめな日常をまさか忘れてはいるわけではあるまい。それとも、女の言う生活はそれを抜きにして成

りたつのか。彼女がこのような状態を望む限り、それはぼくにとつて最も切実な問題になつてくるにちがいない。そのへんのところをどうしてくれるのか。ぼくが排泄しない人間だとでも思つているのか。最近は人形だってミルクを飲ませれば下から出てくるようになっている。ぼくは人形ではない。ミルクなしでも小便は出る。そして今、したいのだ。どうしてくれ!

どうもこうも、訴えるより仕方がない。何故そんなことをいちいち言わなければならないのか、考えていると余計にわからなくなつてくる。わかっているのは、このままではどうすることもできないということだけである。それにしても女はどう処置するのか。見ものである。そのまま放つておくようなそんな薄情なことはしないだろう。二人は夫婦なのだから。半分は何かを楽しんでいるような気分で、



chu. 78

「悪いけど、出そうなんだが」意氣がついている割には弱々しい口調。いざとなるとなんとなく言いにくい。おかしなものである。女を意識しているのか。どうでもいい相手ではないか。体裁を構うことなんかいらない。苦しそうに訴え、困らせてやればいい。

「出そうだ! なんとかしてくれ」ロープを解くしか方法はないだろう。少しでもゆるめたら、あとは力でねじ伏せてやろう。ぼくは身構える。小便は女を倒したあとでゆつくりとやればいい。こんなものは一人でひっそりとするものである。

「はあア?」と女は起きあがる。布団がめくれ、足元で冷気が舞う。そら見る、今頃あわても遅いぞ。生活するって、そんなに簡単なものではない。まして人の生き方まで自分の思うままにしよなうんて、ふざけたことだ。ぼくはとどめを刺すように、

「小便がしたいのだ！」さあ、ロープを解け。

「あら！ごめんなさい。すっかり忘れていたわ。だめ、私って」女は立ちあがり、入口と反対側の戸を開けた。冷たい風が流れ込んでくる。せわしく木戸を引く音が聞こえる。きつい香料の匂いが鼻をつく。そこは便所のようである。暗くてよくわからないが、ちゃんと腰を曲げている女の後ろ姿が見える。何かをとり出している。どうしようというのか？

電気がつく。女が立っている。ガラスでできたシビンを持つている。中腰になりながら、

「気がつかなくてほんとうにごめんなさい」と泣きそうな眼をしてぼくを見る。体に縛りつけていた布団をめくり、シビンを股間にめる。

「さあ、うんと出してね」サッとズボンのファスナーを降ろす。一瞬、縛られて動かないはずの体が横揺れる。なんてことだ！正気のさたか？女のその行為に何をどう感じたらいのかわからなかつた。侵入してきた指はびよいとペニスをつまみ、引き出す。十秒とかからなかつた。

ずぼらで、自分でするのがめんどうな人とか、そうしてするのが趣味である人とか、そうしなければ出にいく人ならともかくも、ぼくは今まで、つい先程まで、自分でつまんで放尿してきた種類の人間である。両腕のない人だつて、一人でひつそりとする日常を失いたくなつために、腹の筋肉の動かし方で勝手にファスナーが開き、ペニスが飛び出すような、そんな排泄方法を発見することだらう。男は立つて自分でその先をつまみ、女ははしゃがんでその出口を確かめながら、それはするようにならう。もう突きたてられたよな気になつてゐるのか。小便してゐるものである。その方法が変われば全ての生活様式がその秩序を失うだらう。女は脛とペニスを持ち、男は卵巣だけを大事そうにその跡にぶら下げているようになるかもしれない。

いつもつまんでくれる指をペニスはちゃんと知つてゐる。つまみ加減だつて難かしいのだ。これでは出るもの

だつて止まつてしまふ。それにしてもなんと用意周到なのか。ぼくの誘拐は、そしてこのよだな生活は、早くから計画されていたようである。二重三重に鍵をかけ、ありつけの知恵をしほつて戸締まりしても、やはり泥棒はどこからか入つてきているものである。尿意を訴えることによってロープがゆるめられると考えたぼくが甘かったのか。そんな策略を女はすでに見抜いている。ぼくにとっては作戦でも彼女にはすでに日常なのかもしれない。ロープは絶対に解かない、そのことを前提に女は考え、行動しているようである。そのためであればどんなことだつてするわよ、ペニスをつまみあげた女の指先はそう言つてゐる。

ぼくは思う、シビンというものを発明したのは人を拘束したことがある奴にちがいないと。縛る側にとつて、その形、持ち運びの便利さ、ガラスの透明、全てに都合よくできている。その容器に放尿する、それは透けたガラスの中に自分を陳列しているようなものである。色によって体調がわかり、量によつて心理を知られ、放尿態度によつて思想まで見抜かれててしまう。

腹と歯に力を入れ、こらえる。こうなつたら徹底して逆らうより方法はない。女が設計した生活を壊すことだ。そのためには一滴だつて出してはならない。

「どうしたの？止まつちやつたの？」女はのぞき込む。指でペニスの位置を変えながら、

「遠慮はいらないのよ。さあー」なんて楽しそうに言うのか。この女はぼくの放尿を愉快がつてゐる。いや、ペニスそのものをおもしろがつてゐるのだ。見ただけで、もう突きたてられたよな気になつてゐるのか。小便したら恍惚として身をよじるつもりか。そうはさせない。ぼくはこのような女に歎びの一滴もあたえるつもりはない。